風の末裔シリーズ・7th シーズンの5

～七時雨（ななしぐれ）・Ⅰ～

©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

窓に貼り付く雪の軋みが耳をそば立て、少年は目を覚ました。夜明けにはまだ間がある。暖炉の薪が燃え尽き、僅かな黒い炭が、薄闇の中、弱々しく明滅している。

少年は身を起こし、分厚い羊毛の敷き物の上を四つ這いで這って、暖炉に寄った。

背後の御簾が揺れた。三重の間仕切り布の間から、紫の前髪の女の子の顔が覗く。明かりが乏しいせいもあるけれど、蒼白い冴えない顔だった。

「ごめん、リリ、起こしちゃった?」

少年は小声でささやいた

「…何か悪い夢見たの? カノン」

「ううん、火が消えかけたから」

「ああ、今朝は冷えるわね」

女の子は、血の気の引いた唇でニコリともせずに言い、部屋の隅の薪の山から細いのを数本引き抜いて、暖炉の方に歩いて来た。

「あんた、気を使って無理するんじゃないわよ。病気になられたら、往生するのはこっちなんだから」

手慣れた感じで焚き火を組む様子を、少年は身じろぎもせずに眺めていた。焔に照らされた白い横顔が、やけに透き通って見える。

火を作り終えると、リリはスッと立って、御簾の向こうに引っ込んだ。寝巻きを着替える布擦れの音が聞こえる。

暗い内に執務室に行って、室内を暖めておくのが彼女の日課だ。だけれど、今日はちょっと早過ぎる気がする。

「ねえ、リリ」

彼女が出掛けてしまう前に、カノンは声を掛けた。

「なあに?」

御簾の向こうの声は、疲れて重だるかった。

勿論、声を掛けたからには言う言葉があったのだが、それらは喉の奥に引っ込んでしまった。

「あの…気を付けてね、坂で転んだら下まで止まらないよ」

〈まさか、あんたじゃあるまいし!〉

と返って来るのが常なのだが、

「ええ、ありがと」

と、気の抜けた返事がしただけだった。

重い冬扉が開いて、一瞬だけ外の音が入って来た。ザアザアと雪を掻き回す風が、上空で踊っている。

「行って来るわ」

声と共に扉が閉まって音は消え、静寂の中に残された。

〈リリ、タベはちゃんと寝た?〉
〈長殿は今日は戻られるの?〉
〈ユゥジーン、きっと大丈夫だよ〉
さっき呑み込んだ言葉達を反芻しながら、カノンはリリの去った扉の方向を見つめていた。

カノンにとって大切な兄みたいな存在、ユゥジーンが、出先から帰って来なかったのが、三日前。午後から急に天候の荒れた日だった。
蒼の妖精の乗る草の馬は、水に弱い。性急な時以外は、悪天候の中を無理に飛ばない。出掛けた者が、雨雪に足止めされて帰らない事は、ままあった。
「でも…」
雪が降り止まないとはいえ、今日で三度目の朝なんだ。カノンは分厚く張られた御簾越しに、外の気配に集中した。
長殿が帰らないのは、昨日からユゥジーンを捜しに行っているからだ。リリは言わないけれど、分かる。何となく、ただ事ではない空気が、ヒリヒリと伝わって来る。
冷気に触れると痺れて動かなくなってしまう自分の体質が、もどかしかった。こんな時に外にも出られず、何も出来ないなんて。

カノンは暖炉前から離れて、寝床の方に移動した。リネンの枕の周りには、リリがユゥジーン宅から持って来た、欠けたコップやら壊れたペンやらが並んでいる。それらを一つ一つ握って集中してみる。
「だめだあ…」
最後のくたびれた書物を取り落とし、カノンは情けないため息をした。
『物から持ち主の居所を捜す術』は、自分の得意分野だ。蒼の里から多少離れても、物を握りしめて集中すれば、何回かに一度は、見付ける事が出来る。しかしそれには、『そのヒトの思い入れのある持ち物』が必要なのだ。ユゥジーンの家には、その……ガラクタしかなかった。
「彼、着たきり雀な上に、大事な物は、いつも身に付けているのよ」
昨日の朝、リリはぶつぶつ言いながら、いくらかユゥジーンが使っていそうだった物を、袋からガラガラ放り出した。
それらを見て、カノンは一目で〈ぜったい無理…〉と思った。ユゥジーンの愛着を感じる物が、何一つないのだ。
「あんだけ足の踏み場もない部屋に住んでいる癖に!」
春になって外に出られるようになったら、一番に強制大掃除してやる! カノンは独り文句を言いながら、もう一度挑戦す

るべく、ガラクタの山に手を掛けた。その時、ふと頭を、ひとつの思い付きが過(よぎ)った。

＊＊＊

蒼の里の居住区の一番高い所に長殿の住居があり、執務室は、そこから少し下がった目鼻の距離だ。大机の前のストーヴが熱を孕んで赤みを帯び、凍った窓が緩み始めた頃、ホルズが入り口から顔を出した。

「ああ、そのままでいい、仕事を続けてくれ」

立ち上がろうとするリリを制して、ホルズは大きな外套の雪を払って壁に掛け、大机に着いた。

「今朝は早いんですね」

リリは長椅子前の丸机で書類の分類をしていた。

「ナーガ長が留守だしな。まだ帰っていないんだろう?」

「はい…」

作業の手を止めずにリリは答えた。

「お前さんのペンダントの羽根は、何とも言わないのだろう? なに、雪で足止め食っているだけだ。今日あたり、ピンシャンして帰って来るさ」

「そうですね…」

娘は同調したが、上の空だった。

見習いの少年が出勤して来て雑事を始めたので、リリは口を閉じて仕事に没頭した。

ホルズは外に出て、灰色の空を見上げた。雪は、明け方程ではないが、やむ事なく降り続いている。

確かに今年は例年よりも空が湿って、雪降りが多い。だが、異常って程でもないし、ユゥジーンが戻って来なかった日も、さほど荒れていた訳ではない。

書類を分類し終わったリリが、立ち上がった。

「皆が来るまで少し時間があるでしょう? 自宅の窓の雪払いをして来ます。薄暗い中じゃ、カノンが可哀想だから」

「あ、ああ…」

ホルズが返事をする前に、見習いの少年が掃除の手を止めて進み出た。

「僕が行って来ましょうか」

この春に修練所を卒業予定の紅顔の少年は、執務室に通い始めてまだ一ヶ月足らずだ。

「ありがと、でも、自分で行く」

紫の前髪は、上着を羽織って、顔を伏せたまま出て行った。

「あ…、僕、いけなかったですか?」

見習いの少年は、どぎまぎしてホルズの方を見た。

「いや、構わん、あれでいい。これからもリリの反応は気にせずに、思った通りに遠慮なく言え」
「は…い」
少年は雑用に戻り、ホルズは机に向かい直し、所々逆さまに挟まった書類を戻して揃えた。
リリは多分、口実を作って、カノンに会いに行きたかっただけだ。今、ユゥジーンの安否を直感で察知出来るとしたら、彼だけだから。何も無いなら無いで、それを確認して、心を落ち着けたいのだ。
(まったく、もっと素直に心配してりゃいいのに)
ホルズは肩を竦めて、また見付けた逆さま書類を直した。

窓の雪払いのついでに、屋根から突き出た雪も落とそうと、リリは自宅から離れた物置に長箒を取りに行っていた。
戻ると、自宅の戸口が開いている。
「ええっ?」
暖炉の部屋に居るべき少年が、そこに倒れているではないか。
「カ、カノン!! あんた何やってんのよ、馬鹿ぁっ!!」
リリは慌てて駆け寄って、肩を抱えて起こした。倒れてからそんなに経っていないようで、まだ冷えきってはいない。
一生懸命引きずって暖炉の前に連れて行き、薪を放り込んで焔を上げた。呼吸はしているが、意識が戻らない。
父の戸棚から度数の高いコニャックを引き抜いて駆け戻り、栓を抜いてグイと口に含んだ。
(こ、こんなのに狼狽えるようなお子様じゃないわよ)
少年の鼻をつまんで唇を開かせ、口を近付けた所で…・・・
気絶していた少年が、いきなり背中に腕をギュッと回して来た。
(ちょ、ちょっと…!)
びっくりしたが、相手はもうろうとしている。温かみを求めて身体が動いちゃっただけかもしれない。振り払うのも可哀想。でも、口に含んだコニャックが…と困っている間に、冷たい手が後ろ襟から背中に入った。

「ひどい・・・」
髪から衣服からコニャックでベタベタになった少年は、恨めしそうにリリを見上げた。
「そんな冷たい手、背中にパーで当てられたら、誰だって吹き出すわよ!」
娘はプンプン怒って、口を拭った。
「もしかして、気絶した振りしてたの?!」
「まさか、そんな命懸けのチャレンジする訳ないだろ。リリに用事があったから、戸口から声を掛けようとしたんだよ。ちょ

っとくらい、大丈夫だと思ったんだ。でも、まあ…ごめんね…」
少年は、まだ凍えてカクカクしている。確かに、悪戯でこんな事をする子じゃないわね。リリは肩を降ろして、コニャックを杯に注いで手渡した。
それをくっと飲み干して、少年は杯を見つめながら言った。
「ユゥジーン、帰って来るよ」
＊＊＊
「えっ？　何て？」
あっけなく言うカノンに、リリは思わず聞き返した。
「ユゥジーンの気配だよ。さっき、その中の…どれだったかな、とにかくどれかから、察知出来た」
カノンは、山積みガラクタを指さした。
「どんどん近付いているよ。もうすぐそこまで来ているんじゃないかな」
「ホント?!　あっ、それで、知らせようとしてくれたの？」
「うん、…そう」
「馬鹿ね…」

リリの言葉を遮るように、通りの方で誰かの叫び声がした。
続いて、雪の坂を駆け降りる複数の足音。ホルズの重量感のある足音も混じっている。

「馬繋ぎ場に着いたみたいだね」
「そうね」
「行きなよ、僕は大丈夫だから」
「あたしはいいの」
「どうして？」
「大勢のヒトが行ったみたいだし」
娘は立ち上がって、毛布と毛皮を持って来て、カノンの肩に被せた。
「僕は大丈夫だって」
「まだこんなに冷たいわ」
足元に回って、冷えた彼の足を擦り始めたリリは、特に意地を張っている風でもなさそうだった。

（…ああ、いつものリリに戻ってくれた）
紫の前髪の下の表情が、朝とは別人のように穏やかだ。
良かった、リリはこの顔の方がいい。この顔にしてあげたかったんだ…。カノンは、ホッと息を吐いた。
リリって娘は、意地っ張りで複雑なようで、実はあっけない程単純だったりする。大勢が迎えて安心なユゥジーンよりも、独りで凍えているカノンの側にいる。彼女には、至極当たり前な事なんだ。

カノンは目を閉じた。
(さっき、もうちょっと気絶していればよかった)
焚き火の焔を頬で感じながら、少年はぼぉっと、久々の安心感に身を任せていた。

入り口に足音がして、戸口が開いた。
「リリ、いるのかい?」
ナーガ長の声だ。
「はい、父様」
「そちらにユゥジーンを運ぶ。暖炉の前に毛皮を敷いておいておくれ」
「は、はい…!」
リリは慌てて立ち上がった。
ユゥジーンは、運ばれて来なければならない程の事態だったの?! カノンも起き上がって、転がるように移動した。

御簾が開いて、ナーガと、里の若者二人に抱えられたユゥジーンが入って来た。真っ青な顔の両目は虚ろで、口は半開き、辛うじて自分で立ってはいるが、支えがないと崩折れそうだ。
青年を毛皮に横たえると、若者達は長に会釈して出て行った。
「治癒の術を施す。カノン、手伝っておくれ」
「は、はいっ」
「父様、カノンはさっき、倒れて…」
ナーガ長は顔を上げて、心配そうに少年を見た。
「大丈夫です、もう回復しています。それよりユゥジーンは?」
前髪をかき上げて青年を覗き込むカノンの後ろで、リリは後ずさりした。
「お、お湯を沸かさなきゃ、…ポット、ああ、その前に、水…」
自分には治癒の術は使えない。気をしっかり持って、自分に出来る事をやらなくちゃ。

「いや、こちらに来ておくれ」
長が、娘の手を掴んで引き寄せた。
「父様?」
長はそのまま、リリの両肩を持って、ユゥジーンの前に押し出した。
「ユゥジーン、リリだよ! 分かるだろ、リリだ!」
何よ、それっ?!
背筋がぞわっとして、身体中に鳥肌が立った。まるでジーンがいまわの際みたいじゃない。恐怖で喉が詰まって、声も出なくなった。
しかし、ぱちくりと瞳をしばたく青年は、そんなに危急な風

には見えない。
「…？」
「ユゥジーン、リリなら分かるだろ。ん？　どうだ？」
長は娘の肩をワサワサ揺らしながら、懸命に話し掛けた。しかし、青年の表情は動かない。
「あの、長殿…もしかして…」
カノンが、口を開きかけた時、青年が横たわったまま、ぽそっと呟いた。
「俺、ユゥジーンって名前じゃない…」
「ええっ?!」
「俺の名前、ジュジュだよ…」
＊＊＊
雪はやんだが、空は相変わらず、鉛色の雲が覆っている。
執務室はいつもの午後の風景。
大机でナーガ長とホルズが、あーだこーだと様々な段取りを話し合い、リリは手前の丸机で、手紙や資料の整頓をしている。
本当は、こんな屋根の下でややこしい文字の山とにらめっこしているより、この娘は、外を飛び回る仕事が好きだ。だけれど、将来大机に着く身だからと、苦手な書類との格闘を、頭を抱えて頑張っている。
入り口の扉が開いて、長い模擬刀を二本持った、初老の大男が入って来た。ホルズの父親で、ナーガの前に長を務めていたノスリだ。今は必要な時以外は出張らず、のんびり隠居をしているが、現役時代は、里一番の剣の達人だった。
ナーガが生まれる前、長の血縁に適任者がいなかった時期に、ノスリ・ツバクロ・カワセミの、三人長の時代があった。足りない能力を補い合った強い絆の三人だったが、今、里に健在なのはノスリだけだ。ちなみにツバクロはナーガの父親だ。
「ノスリ殿、ご苦労お掛けしました」
ナーガとホルズが椅子から立ち上がったので、リリも急いで立った。膝に乗せていた書類がバラバラ落っこちた。
「構わん構わん、俺に気ィ使うな」
ノスリは長時代から変わらぬ大らかな声で言い、足元の書類を拾ってリリに手渡した。
「あれ、親父、奴は？」
ホルズが首を伸ばして、入り口を見やった。
「ああ、修練所の方を散歩したいって言ったから、別れたよ。入学したばかりの頃の事は、何となく覚えているって言っていたな」

ノスリは大きな身体を長椅子に沈めて、見習いの男の子が運んで来た茶を受け取った。
「ユゥジーンは大した奴だぞ。ジュジュって幼名の小さい頃の記憶しか残っていない癖に、身に付いた太刀筋だけは、身体が覚えていた」
「そうですか、よかった…」
ナーガがホッとした表情で、椅子に身を降ろした。
「私が山の雪洞に彼を見付けた時は、剣の振り方どころか、言葉すら忘れてしまった風でした。この調子でちょっとずつ、思い出してくれればいいんだけれどね」
「取り敢えず、剣士としてのユゥジーンが健在だと分かっただけでも、万々歳だ。さすが子供の頃から親父が仕込んだだけあるな」
ホルズも肩の力を抜いて、見習いの子が差し出す湯飲みを受け取った。
「記憶がなくても、剣が使えたら万々歳なんですか?」
見習いの少年は、つい聞き返した。
「ああ、里の中にいたらピンと来ないだろうがな」
ホルズが茶を啜って、少年の方を向いた。
「蒼の里を一歩出たら、『剣士ユゥジーン』の勇名は、そこそこ響き渡っている。里を護る礎として、強い剣士の評判は大切なんだぞ」
「へ…へえ…」
勇名剣士の呑気でボサッとした面しか知らなかった少年は、素直にビックリした。
「まあ…」
ノスリが、空の湯飲みを丸テーブルに置いて立ち上がった。
「しばらくはそっとしておいてやろう。記憶をなくした経緯も何も、本人は覚えていないんだろう?」

ユゥジーンが帰った後、ナーガ長がもう一度、雪洞のあった山に赴いたが、原因となりそうな手掛かりも何も、分からず仕舞いだった。
元々の任務は、麓の村の小さな依頼事だったが、そちらは滞りなくこなし、普通に帰路に着いている。村長からも、取り立てて変わった証言は得られなかった。

「あんまり一度にあれやこれや言っても、可哀想だ。一番辛いのは本人だろうから。手が足りない事があったら、俺に言ってくれ」
「助かります」
ナーガ長がノスリに礼をしてから、リリの方を向いた。

「あ、はい」
会話には加わらないで手元の書類に目を落としていた娘は、慌てて抜き出した数枚を差し出した。
「これ、彼の受け持ちだった地域と、最近の案件です」
「ふむ」
ノスリは受け取ってざっと目を通してから、リリを見てニッコリした。
「これらは俺が引き受けよう。手際がいいな、リリ。ナーガの子供の頃よりも優秀だぞ」
「まさか…」
娘は鼻の頭を赤くしてうつ向いた。この身体の大きいノスリも、里の中で数少ない『リリが好きな大人』だ。
「所で、リリ」
「はい」
「そろそろ昼飯だ。子供の頃に奴が好きだった料理を、娘達が用意してくれたんだ。ユゥジーンを呼びに行ってくれないか」
「え…」
「里の道も昔と変わっているし、迷子になるかもしれん」
「……」
「僕が行って来ましょうか?」
見習いの少年が茶器を片付けながら言った。
「いや、お前には…そう、おウネ婆さんの所に薬を取りに行って貰わねば」
ホルズが慌てた感じで口を挟んだ。
「あれ? 薬が出来るのは夕方だって言っていませんでした?」
少年は、ただ素直に疑問を口にした。
「ああ――・・」
苦虫噛み潰した顔のホルズに見えない角度でため息付いて、リリはストールを羽織った。
「いいのよ、行って来ます」
＊＊＊
明け方までの降雪が根雪をふわりと覆い、修練所の放牧地は一枚の滑らかな絹布みたいだった。
その中を足跡を付けて歩くユゥジーンは、すぐに見付かった。しかしリリは、近寄ろうとした足を止めた。彼は一人ではなかったからだ。
「あら、リリさん」
ユゥジーンの隣を歩いていた少女が、先にこちらを見付けて、口角を上げて微笑んだ。くりんくりんにカールした髪をカラフルなリボンで結った、女の子らしい可愛い娘だった。
リリは、仕方なく会釈して近付いた。

「こんにちは、リリさん。今、ユゥジーンに、里の事とか草の馬の事とか、お話していたの。色々忘れちゃって、可哀想でしょう。たまたま会ったのよ、裁縫の習い物の帰りに」
リンゴみたいな頬をした娘は、聞いてもいない事をベラベラと喋った。
(たまたま会うような通り道でもないわよね…)
シラッと彼女が喋り終わるのを待って、隣で突っ立っているユゥジーンにだけ話し掛けた。
「ノスリ殿が、お昼を一緒にと仰っています」
つっけんどんに、事務的に言った。
「あら、じゃあ、私、これで。またね、ユゥジーン」
少女は言って、わざとらしくスカートをひるがえして、お尻を振りながら歩いて行った。去り際にウインクしたのも、まる見えだった。

ユゥジーンは明らかに、去り行く彼女を気にしている。
「お断りしますか?」
リリは変わらず無機的に聞いた。
「あ、断れるの?」
「はい、貴方に別な用事がお有りなら、そう伝えておきます」
「じゃあ、えっと、あの娘(コ)に、料理を味見して欲しいって頼まれたんだ、だから…」
「はい、そのように伝えておきます」
リリは、もう何も喋りたくない気持ちになって、踵を返そうとした。
「あっと、あの…」
呼び止められて、振り返らずに足だけ止めた。
「何ですか?」
「あの…今の娘もそうだけれど、君と…その…俺との関係を、気にしているんだ。えっと、記憶をなくす前の俺って、君と付き合っていたの?」
リリは、出来るだけ無感情な声で答えた。
「まさか、あたし、こんな子供ですよ」
ざんばら髪をやめてから、少しは背の伸び出したリリだが、まだまだ、さっきの女の子なんかに比べたら、全然チビッコだ。
「そうだよね。約束なんかもしていないよね」
「そんな話は、した事もありません」
リリは、後ろも見ずにスタスタ歩き出した。背後で彼が、ちゃっかり待っていた今の娘に駆け寄るのが分かる。
あの娘だけではない。放牧地の土手の陰や、里の道々で、彼を見つめる熱い眼差しを、わんさと感じる。

回復した彼が、出歩けるようになってから一週間。気が付いたら、そんな現象が巻き起こっていた。いつ見ても女の子がまとわり付いているし、彼もまんざらじゃない感じだ。
リリとしてはなるべく彼とその周辺には近付きたくないのだが、ノスリやらホルズやらに、しょっちゅう彼の世話焼きを頼まれる。
ロマンチストな大人の男は、〈ユゥジーンに一番大切なのは、結局リリ！　リリといれば記憶が蘇る！〉って甘いストーリーを期待しているのだ。
「ヒトの心が、そう単純に行く物ですか」
肩を怒らせてズンズン歩きながら、リリは吐き捨てるように呟いた。それに……。
聞きたくもないのに、背後に、甲高い甘え声と、デレデレした軟派男の声が聞こえる。
（あんなの、ジーンじゃない…）
＊＊＊
「ああ、それ、パティだよ。夏にサォセンセのハウスでよく見掛けた」
暖炉のオレンジに照らされて、本から顔を上げたカノンが答えた。
「ハウス出身じゃないんだけれど、サォセンセの奥方の姪っ子…だったかな？　その縁で、たまに手伝いに来ていた。世話焼きで、機織り機みたいによく喋る。そっか、そういえば、ユゥジーンがハウスを訪れた時は、必ず現れていたなあ」
「ふうん…」
リリは、無関心な感じで、固いチーズをナイフでガリガリ削っている。
「まあ、いいんじゃないの？　ユゥジーン、早く嫁さん貰うべきだって、リリ、いつも言っていたじゃない」
「そうね…」
また無関心風な返事だ。でも、ナイフをチーズに突き立てる手付きが、絶対そうは思っていないと、語っている。
不揃いのゴロゴロのチーズをスープに放り込み、溶けて行くそれを睨みながらリリは言った。
「それでも、ノスリ殿の心遣いを反故にして、女の子を追い駆けるなんて有り得ない。男の子って、みんなああなの？」
「知らないよ、僕、女の子に誘われた事なんかないもの」
矛先がこちらに向きそうなので、カノンは頑張って話題を逸らした。
「いいじゃん、ユゥジーン、今が人生最大のモテ期なんだから。今を逃したら、それこそ一生お嫁さんに恵まれないかもしれな

いよ」
「それが分かんないのよ。何でいきなり今、その『モテ期』が、来ちゃう訳？」
「えっ・・?!」
カノンはちょっと止まった。
しらばっくれているのか？　本当に分かっていないのか？
「えーと…、えっと…・・ああー、そもそもユゥジーンって、モテる要素満載じゃない。そうでしょ？」
「そぉお？」
「だっ、だってカッコよくない？　剣は強いし、足長いし、腹筋割れてるし、髪の色も綺麗だし」
「ふうぅ～～ん」
リリは、心底分からない感じだ。
カノンはそれ以上、下手に喋らない事にした。地雷が一杯な真っ只中に立たされている…。
「女の子って、そういうの基準で男性を好きになったりするんだ…ふうぅん…。じゃあ、彼は、いきなりその…カッコよくなったの？　髪の色が綺麗なのなんて、昔っからじゃない」
「ま、まあね…」
カノンは慎重に、地雷原を匍匐(ほふく)前進する。
「ぼ、僕、女の子じゃないしなあ。記憶をなくして可哀想って

のが、母性本能をくすぐるとか？」
「ふううむ……そういえば、パティって娘も、そんな事言っていたわね」

そこで、カノンにとっての助けに舟の、時間を告げる鐘が鳴った。
「あら、もうお昼休み終わり？　執務室に戻らなきゃ。食べたら食器は拭いておいてね」
「リリは食べないの？」
「書類が溜まっているのよ」
御簾をくぐろうとする娘を、カノンは呼び止めた。
「あのさ、リリ」
「なあに？」
「……」
「なあによ、忙しいのよ」
「えっと…、リリさ、いちいちノスリさん達のそういう策略に、付き合わなくてもいいと思うよ」
「あら、味方してくれるの？」
「いや、そうじゃなくて…それでなくても仕事多いんだからさ。昼食の時間がなくなって、夜にバカ食いするのって、下半身デブ一直線なんだよ」
「うっさいわね！　このデリカシー欠如男！」
堅パンをドブンとスープに浸けてそれを一気に口に押し込み、リリは髪をひるがえして、執務室に駆けて言った。

残されたカノンは、泡立ったスープを見つめて、スプーンをチンとならした。結局、怒らせちゃった。
モテ期もクソもない。ユゥジーンは元々、男の自分でも見惚れちゃう位、カッコよかった。おまけに草原に名の通った剣士だし、エリートが集まる執務室でも中核的存在だ。
本来、里の女の子がワアワア騒いでもおかしくなかったのだ。それが、何だって今まで、女っ気の分野でシーンとしていたかというと…。
前に、リリが二晩いなくなった時の、狼狽えた顔が目に浮かんだ。そう、あの、いざリリの事となると子供みたいに我を忘れるあからさまっぷりが、女の子を含む周囲をドン引きさせていたのだ。
それが、記憶と共にリリの存在が洗い流された今、ここぞとばかりに女の子達がアタックをかけて来るのは、至極当然であった。
「そんな事も分かんないなんて、変な風に抜けてんだよなあ」
カノンは、チーズでもったりしたスープを口に運びながら、

うず高く積まれた書物を引き寄せた。
「やっと今日の分の書物が読める」
＊＊＊
その日も、一瞬陽が射したりモヤが掛かったりの、はっきりしない天気だった。
「あーあ、久し振りに湿った床が乾くと思っていたのに」
見習いの少年は、ぼやきながら空を見上げて、ドロドロの玄関デッキをモップでこすっていた。午前中せっかく綺麗に拭き上げたのに、今しがた焦って駆け込んだ二人のせいだ。
執務室の中で、大人達が険々轟々(けんけんごうごう)言っているのが聞こえる。普段穏やかでひょうきんなホルズが真剣な声で怒鳴っているのに、何だか中に戻りたくなかった。
戸口が細く開いて、紫の前髪のリリがスッと出て来た。小脇に手紙の束を抱えている。少年と目が会うと、苦笑いして小声でささやいた。
「ちっとも集中出来ないの。そこの椅子で仕事してもいい？」
「ああ、勿論ですとも」
少年は慌てて、デッキの隅の小さなベンチに立て掛けていた掃除道具を片付けた。
「悪いわね」
リリは、トンと腰掛けて、何組かに分けた手紙を広げ直して集中し始めた。
この小さな女の子の姿をした女性は、本当は自分よりも年上らしい。文字が読めないけれど、集中する事で、それを書いたヒトの心を読んでいる…って事は、ホルズが教えてくれた。だから彼女が書類を睨んでいる時は、少年も物音を立てないように、緊張するのが常だった。
戸口の向こうで、ひときわ騒がしい声がした。
リリは集中が切れた感じで顔を上げた。また目が合ったので、手持ち無沙汰の少年は話し掛けた。
「どうなるのでしょうね」
「どうもこうも…本人にその気がないのなら、無理強いしたって仕方がないわ」
「ええっ？　だって」
「駄目かもね、もう…」
「リリさんがそんな事を言うなんて」
言ってしまってから少年は、怒鳴られるのではないかと肩を竦めた。しかし女の子は、眉を一瞬吊り上げただけだった。
戸が跳ねるように開いて、憮然とした表情のユゥジーンが出

て来た。戸口にホルズやノスリが顔を見せるが、振り返りもしないで大股でデッキを横切り、坂を登って里奥へと姿を消した。以前は可愛がってくれた少年にも、一瞥もなかった。

「リリ、こちらへ来なさい」

大机の方から、ナーガ長の静かな声が呼んだ。リリは心底嫌そうな顔をして、仕事材料を抱えて、室内に戻った。

入れ違いにホルズが出て来た。少年はホッとした。今の時点で一番話しやすいヒトだ。

「いやまったく、参ったな」

外に向かって伸びをしたホルズは、珍しく眉間に縦線を入れいる。

「あの、ユゥジーンさん、本当に執務室辞めちゃうんですか?」

「うーん…本人がその気なら、こちらは引き留めようがないからなあ」

「そんな…」

記憶をなくしたユゥジーンが帰って来て一ヶ月余り。執務室の仕事はまだ無理と踏んで、ノスリの親戚の鍛冶屋や牧場仕事を手伝っていた。

しかし執務室の面々は、当然、様子を見て復帰させるつもりでいた。記憶がなくても、ユゥジーンはユゥジーンだ。最初は誰かが付いて色々教えればいいし、以前関わった物と接している内に、ひょんと思い出す事もあるだろう。何より、彼は外の者に人望があるし、剣の名声だって執務室の財産だ。

それが、今日の昼いきなり現れて、執務室を辞めさせて下さいと言い出したのだ。ホルズは言葉も出ない程驚愕し、少年は用事で出ていたナーガやノスリを呼びに行かされた。

「どうもなあ…、俺達がのんびり構え過ぎたのもいかんかったのだが。その間に付き合っていた連中が、どうもなあ…」

ホルズはさっきまでリリが座っていたベンチに座って、歯に物が挟まった言い方をした。

「まあ、うちの親戚筋だから悪く言えんが。う――ん…」

「あたしは嫌です!」

大机の前で、リリはきっぱり叫んだ。正面には困った顔のナーガ長と、傍らにノスリ。

「そう突っ跳ねるな、リリ。長殿がお前に命令するなんて、ほとんど無いだろう? 本当に必要な時しか命令しないからだぞ」

尊敬するノスリの頼みだって、今度ばかりは聞きたくない。

「嫌です。辞めたいって言うのなら、辞めさせてあげればいいのよ。何であたしがそんなヒトの面倒見なきゃならないの?!」

前髪だけでなく後ろ髪まで逆立てる娘に、何か言いかけるナーガより先に、ノスリが正面に回って肩に手を置いた。
「ああ、まったくお前の言う通りだ。本当にすまない。しかし、俺は、奴が痛ましいんだ」
「何がっ？　どうしてっ？」
「俺は、まだ鼻ったらしのガキの頃から奴を知っている。遊びたい年頃なのに、真面目に毎日執務室に通って雑用をこなし、青アザだらけになって二刀流を学んだ。学業だって苦手だったのを頑張って、長殿に認められるだけの成績を取った。こんな事で見放したら、その頃の奴が痛ましいんだよ」
「……」
リリは口をへの字にしたまま、ノスリから視線をそらせてうつ向いた。
「……いつ出発ですか？」
「明日にでも」
机の向こうのナーガが答えた。

＊＊＊

夜通しダラダラ降ったり止んだりの雪は、朝になっても変わらなかった。馬繋ぎ場に馬装をした馬が二頭並び、小柄な若紫の前には、旅装のリリが立っていた。
（いっそ吹雪になってくれたら、中止に出来るのに…）
うんざりと空を見上げた視線を下ろすと、里奥に通じる坂道を、のろのろした足取りでこちらに歩く若者が見えた。
「おはよ」
リリは小さい声で短く挨拶した。
「ん…」
ユゥジーンはさらに短く答えた。毛糸の帽子を目深く被り、襟巻きを鼻までたくし上げているので、表情も分からない。しかし、カー杯乗り気でないのは分かる。
「行くわよ、行ける？　それともやめとく？」
「やめてもいいの？」
「貴方が決める事だわ」
「……」

「よっお二人さん！」
冷えた空気を打ち破るように、大柄なノスリが現れた。
「生憎の天気だな。まあ、これ以上悪くはならないさ。ナーガ達は忙がしくて見送りに来られないが、気を付けて行って来いとの伝言だ。ああ、これを持って行け」
大きな懐から二つの包みを出して、それぞれに渡してくれた。ほんのりと暖かい、粉を蒸した匂いがする。ノスリ家名物の黒糖団子だろう。ユゥジーンも喉で小さく返事して受け取った。

リリは身軽く馬に跨がったが、ユゥジーンは自分の馬を見つめて突っ立ったままだ。まさか、馬に乗る事すら忘れているのだろうか。
「どうした、脚上げてやろうか？」
ノスリに助けられて、ようやく馬上に収まった。
「あ、あの、やっぱ、飛ぶんスか、これ」
本当にまさかだったようだ。
「身体が覚えているだろう、心配するな」
「いや、あの、ちょっとタンマ…」
リリは無言で、横から隣の馬の尻をドンと蹴った。素直なユゥジーンの馬は、バヒュンと垂直発進した。
「うひえっ」
鞍上がタテガミにしがみつくのを確認してから、リリは静かにノスリに向いた。
「では行って参ります」
「すまないな、でもお前にしか出来ない事だ」
「そんな事ないです。彼のおもりなんて、誰にでも出来るわ」
「いや、お前でないと駄目だよ。執務室だってお前がいないと困るのに、ナーガがわざわざお前を指名したんだ」
「……」

竜胆（りんどう）色の若紫も舞い上がり、二騎がゆっくり里を離れるのを見届けてから、ノスリは執務室への坂を登った。
夕べ、サォ教官の妻である自分の末娘や、親族達に聞き回って、事の次第がはっきりした。要するに、ユゥジーンと付き合っていた娘達やその親兄弟の、考え無しの言動が、元凶だった。
記憶のない彼に、『剣士ユゥジーン』が如何に勇気凛々、素晴らしく優秀だったかを、事あるごとに得々と語ったのだ。まあ、彼等は誉めているだけのつもりだったのだろう。
しかし…、自分がその身にならなきゃ解らないのだろうが、そういうのって、本人にしたらプレッシャーにしかならない。まったく覚えがないのに、『魔物や野党に先頭切って立ち向かう勇者』とキャラ付けされているのだ。このまま執務室で働いていたらエライ目に遭う…と思っちゃっても、仕方がないだろう。

「だから、俺等は、ゆっくり見守るつもりだったんだ…」
たとえこの先記憶が戻らなくても、だったら少年のジュジュからやり直せばいい。あの、前向きで挫けず、優しく素直なジュジュなら、直ぐに元のユゥジーンまで成長出来る。自分達との関係も、また一から積み上げて行けばいい。
ナーガもホルズも、そのつもりだった。なのに…
優秀な入り婿を迎えたい娘の親族は、何とか他を抜きん出よ

うと、こぞって彼の耳に、甘い言葉を吹き込んだ。彼が執務室に戻るのに難色を示すと、それに同調し、〈だったらうちの家業を継げばよいぞ〉とか言っちゃったらしい。まさか本当に辞めるとは思っていなかったのだろうが。

辞めたいと言う者を無理に繋ぎ止める訳には行かない。執務室の仕事は、嫌々では出来ない。

ナーガ長は、辞めるのなら最後に一つだけと、条件を出した。自分が発見された雪山に行き、記憶をなくした原因を突き止めて来いと言ったのだ。

「えええっ?!」

「君の人生を大きく変える原因になったのだから。それが出来れば、この先君がどう生きようと、我々は安心して送り出せる」

「長様に分からなかった事が、俺に分かる訳ないですよっ」

「結果は出せなくてもいい。努力だけして来なさい」

「ああ、はい、それなら…」

安堵した顔のユゥジーンの斜め後ろで、ノスリとホルズは、(こいつ絶対行くフリだけで、何もしないで帰って来るつもりだな)と思った。

「しかし、馬の乗り方も生き抜く知恵も忘れている君を、一人で行かせるのは心配だな。私の娘に補佐をさせよう」

「えっ、ええっ!」

いつも睨み付けて来る無愛想なあの子供?!

抗う術もない。蒼の長の決め事は絶対だ。で、ユゥジーンは渋々承知して、憮然と部屋を出る事となる。

執務室の手前で、ノスリはもう一度振り返って空を見た。

リリがゆっくり飛んであげているのだろう。二騎の馬影はまだそんなに離れていなかった。

自分だって、剣を教えてくれと必死に喰らい付いて来た、あの大切なジュジュを、執務室から失いたくない。

「頼んだぞ、リリ…」

＊＊＊

ユゥジーンが発見された雪山は、高空飛行で行けば二時間程の所だ。ナーガ長が彼を連れ帰るのに時間が掛かったのは、半分気絶した状態の彼を、ジェット気流に乗せるのは無理だったからだ。

今も、乗馬を忘れた彼のビビりっぷりに、高空飛行は無理と判断したリリが、ノロノロと風の緩い低い所を飛んでいる。

「ねえ、そろそろ休憩にしようよ。俺、キッツイよ、こういうの。寒いし、もうヘトヘト」

子供の記憶しかないにしても、以前の彼からは駆け離れた言葉使いだ。付き合っていた女の子達の影響なんだろうな。
「身体が前のめりで、力が入り過ぎているからです。姿勢を正して坐骨で乗るようにすれば、そんなに疲れない筈です」
「だから、俺、君とか執務室のヒト達と違うんだって。昔は知らないけれど、今は普通の平民になりたいの！」
「平民って何です?!」
リリはカッと来て、隣のユゥジーンの胸ぐらを掴んでしまった。帽子が飛んで、隠れていた顔があらわになった。
「??」
目の回りと頬に青黒いアザ。特に左頬が酷くて、唇の端まで腫れ上がっている。
「あ、あんた、それ、どうしちゃったの?」
「ひっぱたかれた」
「誰に? なんで?」
「これはパティ…、右目はアイリン、顎のはザーラ、…あれ? 右がパティだっけ?」
「知らないわよ…」
「執務室を辞めて来たって言ったら、いきなり逆上された」
「そりゃ…そうでしょう」
「何でだよ? 皆、心配心配って…。危ない所に行く貴方をいつも胸を潰して心配していたのよって、口を揃えて言うから。じゃあ、辞めれば胸を潰さなくてもいいンじゃネ? って思って辞めたのに」
「……」
リリは、掴んでいた胸ぐらを離し、その手で彼の馬の手綱を引いた。馬は地上に向いて降下を始めた。
「休憩にしてくれるの?」
「貴方の帽子を拾いに行かなくちゃ…」

雪の少ない樹間に馬を降ろし、座布を広げてユゥジーンは生き返った顔で腰を降ろした。
リリはすぐに毛糸の分厚い帽子を持って戻って来た。
「凝った造りね」
「うん、パティが最初の頃、くれた」
「そう…」
「あんなに優しかったのに。女の子って全然分かんねーよ」
その時、ユゥジーンは初めて、紫の前髪のつっけんどんな娘が、自分に向かってクスリと笑うのを見た。
「えっ、何? おかしい?」
「あ、ううん、ごめんなさい。女の子を分かっていない所は、前と変わんないな…って思って」

「何だよ、君には分かるのかよ。あっ、ああ、そっか！」
ユゥジーンは、リリの持っている帽子を見た。

〈あの長娘の女の子は、触った物から、持ち主の心とか、みぃんな読み取っちゃうのよ〉
パティや他の女の子に、漏れなく言われていた。これを編んだパティの心とか、被っていた自分の事も、分かっちゃうんだろうな。
「…そんなにのべつまくなしにヒトの心なんか、探ったりする訳ないでしょ」
彼の心を見透かすように女の子は言って、毛糸の帽子をギュムッと被せて来た。
「べっ別に、俺は何も…」
「ちゃんと集中しなきゃ出来ないし、それなりに疲れるんだから。…まあいいわよ、皆に嫌われているのは分かっているもの」
「え…」
確かにパティ達は、この娘の話をした後に、〈おっかないわよねぇー〉とか、〈貴方も気を付けなきゃダメよぉー〉とか、悪意に思える尾ひれを付け足していた。
「えと…、嫌われてる訳でもないと思うよ。自分達はそういう術使えないから、ビビってるだけだよ、きっと、うん」
「どちらかというと、その手の術が得意なのはカノンの方よ。でも女の子達は、カノンの悪口は言わないでしょ」
ユゥジーンが返事に困っている間に、リリは鞍袋から火起こし道具と燃料を取り出して、小さい火を起こした。
「焼き石を作ってあげる。靴に入れておくと暖かいから」
「あ…ありがと」
「寒いだのキツイだのブーたれられたら、あたしが疲れるのよ」
「……」

ついでに沸かした熱い湯茶を受け取って、ユゥジーンは改まって聞いた。
「あのさ、さっきの…女の子の気持ちの話。…君、分かるの？なんでパティ達、いきなり逆上したのか」
「ああ…」
リリは火の中の石を棒でつつきながら、しれっと言った。
「簡単だわよ。彼女達は執務室で働く貴方が好きだったからよ」
「ええっ？　だって、心配で胸が潰れそうって…」
「それは、貴方を心配する自分が好きなだけよ。ついでに言うなら、それを言葉にしてわざわざ貴方に打ち明ける自分も、好きなのだわ」
「……」

「そんな気持ちを全然分かってくれない上に、勝手に逆な事をやらかす貴方に、怒りのエネルギーが爆発したのよ」
「分かる訳ないじゃん！」
　大声を出した拍子にカップの茶が手の甲に掛かり、ユゥジーンはアチチと悲鳴をあげた。
「女の子ってそういう生き物なのよ。甘く見た貴方がいけないのだわ」
「……」
「それにしても、随分思いっきりぶん殴った物だわね。加減って物があるでしょうに。見せてご覧なさい」
　リリはユゥジーンの顎を持ち上げて、切れた唇を覗き込んだ。
「治癒の術ってのをやってくれるの？」
「こんなくだらない怪我に、わざわざ術なんか使いません。もっとも、あたしには、治癒の術は使えない」
「長娘なのに？」
「長娘でも出来ない物は出来ないの」
「しょぼー」
「うるさいわね」
　娘は膏薬入れから薬を取って、小さい指で傷口に塗り込んだ。
「あのさ」
「喋ると薬が口に入るわよ」
「やっぱり君と俺って付き合ってたんじゃないの？　あぐゅ！」
　口の中に、思い切り苦い膏薬の指が入った

＊＊＊

「ぐあわあぁぁ〜〜」
　喉を押さえて七転八倒するユゥジーンの前で、リリは膏薬の瓶をスンと嗅いだ。
「そんなに酷い味なんだ。まあ、おウネお婆さん特製だから原料はエゲツないモノを使っているのかもね」
「ぅ、ぅ、・・エゲツないモノっで・・？」
「聞きたい？」
「・・いいや、いい・・」
　濃いお茶を三杯喉に流し込んで、ユゥジーンはやっと地獄から生還した。
「酷ぇな、わざとだろ」
「わざとやるんなら、目に突っ込むわよ」
「・・・・」
「貴方がいきなりおかしな事を言うから、手が滑っただけよ」
「だって…」
　ユゥジーンは上目でリリを見つめ、鷹に挑むネズミのような口調で、そっと言った。

「君が…俺が記憶がなくなったのを、ただ一人だけ、嫌がっている風だったから」
「??　何よ、それ?」
「最初に迎えに来てくれた長様や、執務室のオジサン達も、記憶がなけりゃないで何とかなるって、気楽な感じだった。女の子達なんか、むしろ喜んでるみたいだったし。以前の俺って、そんなにどうでもイイ奴だったの?　ってそれなりに悩んだんだぞ、これでも」
　リリは、とぼけていた表情を正して、彼の前に座り直した。
「そんでさ、君だけが俺と接するのを全力で嫌がっていたから。もしかして、君にとっては、記憶喪失前の俺はどうでもイイ奴じゃなかったんじゃないの?　って思ったの。違う?」
「……」
「どうでもよくナイ奴だったから、君だけダメージ特大だったんだろ?　そんで避けてたんだろ?　ねえ」
「もう一度、喉に薬、突っ込むわよ!」
　女の子の勢いに、ユゥジーンは黙った。が、この女の子をやり込めてやったぞ!　って目が、ニヤニヤしている。
「いやごめん、もう言わない。言わないから、ホント」
　リリはムスッとしたまま無言で、焼けた石を棒で拾って布に包み、彼に突き出した。
「さ、さんきゅ…」
「…あたしが最初に会った蒼の妖精が、貴方だったのよ」
「えっ?」
「ああ、父様以外で、よ。あたしの母様は他所の部落のヒトだったから。七つまでは、そこで育ったの、あたし」
「あ、…ああ」
　女の子達からそんな話は聞いた気がする。
「四つの時に、部落近くの森で、貴方の落とし物を拾ったの。返してあげるまで、ちょっと色々あったわ。まあ、そんな縁で、里へ来てからも、何やかや面倒見てくれた。それだけの間柄よ。これで納得?」
「…あ、ああ、はい、了解」
　茶化して言った事に大真面目に説明されて、ユゥジーンは罰悪く、その話題を閉じた。
　二人、また馬に乗って飛び始める。今度は靴に入れた焼き石が暖かく、驚く程楽だった。
「ねえ、この石、めっちゃいい!　君、かしこいなあ」
　リリは振り返って目を丸くした。
「貴方が教えてくれた事だわ」

「えっ、そうなの？」
「こういう雑学とか、部落でのヒトとの関わり方とか…、外から来たあたしは、本当に何も知らない子だったから。父様は忙しかったし…、教えてくれたのは、ほとんど貴方だったわ」
「マジ？　俺、めっちゃイイ奴じゃん」
「うん、そう…いい人だったわ」

地形が複雑になり、高度が上がって来た。出発時より格段に寒い筈だが、ユゥジーンは文句を言わなかった。
「あれが、貴方が訪ねた集落だわ」
山間に小さな部落が見え、リリは少し進行方向を変えた。
「ヒトの住んでいる所の真上は通過しないって決まりなの」
「ふうん、それも俺が教えたの？」
「そうよ」
ユゥジーンはホッと頬を緩めた。女の子は以前と違って、柔らかく喋ってくれるようになった。話してみれば、立場が複雑なだけで、結構普通な娘(コ)じゃん。この娘と二人きりで行動なんて気が重かったが、何とかやって行けそうだな。

やがて、雪の中に岩が露出した急斜面が見え、その一角の突き出た棚に、リリは馬を降ろした。ユゥジーンも辺りをキョロキョロしながら後に続いた。
「そこの斜面に雪洞を作って貴方はいたそうなんだけれど…、覚えている？」
地図を広げて確認しながら、リリは窪んだ雪の壁を指した。一ヶ月も前の事なので、洞は塞がって痕跡は無い。
「うーん…」
ユゥジーンは神妙な顔をして、首を横に振った。
「正直、記憶にあるのは、君の家の暖炉の前くらいからなんだ。それ以前は、辛い、恐い、寒い、って感情しか覚えていなくて」
「そう…」
リリはちょっと考えてから、両手を高く挙げた。小さい掌の間に、キンキン音をさせて風が渦巻く。
物珍しそうに眺めるユゥジーンの横で、その竜巻は雪壁に向かって飛んだ。ジャリッと音がして、硬い雪がえぐれた。
「おい、まさか！」
飛んで来た雪塊を避けながら叫ぶユゥジーンを尻目に、リリはまた手を挙げて同じ作業を繰り返した。
「雪洞を掘って同じ状況を作ってみましょう。何か思い出せるかもしれないわ」
「同じって…、洞の中で夜明かしするって事？」
「そうよ」

「いやいやいやいや！　それはやめとこうよ、有り得ないよ！」
「記憶喪失の原因を探りに来たんでしょう？」
「だからって何も進んで辛い思いする事ないだろ。麓の村！あそこに泊めて貰おうよ」
「……」
「とにかく俺はゴメンだぞ。こりごりだ。記憶はうっすらだけれど、めっちゃ辛かったのだけは覚えているんだ。どんだけ辛かったか、君には分かんないだろ。ベッドで寝よ、ベッドで！記憶が無くたって命に関わる訳じゃなし」
「……」
　女の子が黙っている間に何とか押し切ろうと、ユゥジーンは捲し立てた。
「そもそも困るのは執務室のオジサン達だろ。いや、俺も、あんなに大騒ぎになるとは思っていなかったし。何だったら辞めるのを撤回してもいいよ。女の子達の機嫌も直るし、君だって余計な仕事をしなくて済むんだろ？」

　リリは、さっきから気絶しそうだった。
　目の前の、ジーンと同じ姿をした男性が、ジーンと同じ声で、ジーンは絶対言わない言葉を、長々と吐き出している。それが近くなったり遠くなったりして、頭の中でワンワンする。
　だから嫌だったんだ…、一緒にいるのも、話すのも…！
　女の子の、思い切り振り上げた手が、今までの百倍もの竜巻を作った。仰天して言葉が止まったユゥジーンを掠めて、それは唸りを上げて雪壁をえぐった。
　――ギャギャン!!!!――
　硬い氷が渦を巻いて砕け、ぽっかり開いた大穴の横で、ユゥジーンは尻餅を付いた。
　リリは風を投げた姿勢のまま、うつ向いて言った。
「…別々に行動しましょう」
「えっ？」
「貴方、麓の村で待っていて。あたしがここを拠点に調査する」
「何でそんなに調査にこだわるのっ。俺は記憶喪失のままでもいいって…」
「あの！」
　彼の言葉を遮った女の子の声は、無感情に戻っていた。
「貴方の為じゃありません。あたしは自分の為に調査するんです」
「何だよ、それ？」
　ユゥジーンも、ふて腐れた言い方に戻った。
「あたしは長娘です。この先、里の皆に命令する立場になるかもしれない。だから自分が今、長様の命令をサボる訳に行かな

いの」
「へえ？　生真面目っていうか…何か、大変なんだねっ」
「自分の為だから、貴方がどうとか関係ない。調査が済むまで、麓の村で待っていて下さい。手持ち無沙汰だったら、自分が来た時の事を村のヒトに聞き回ればいいわ。それも立派な調査だから」
「う、うん…まあ、それなら、了解…」
逆らう理由はない。ユゥジーンは後ずさりして、自分の馬に手を掛けた。

＊＊＊

剣のような峰の直下に張り付く、小さな部落。雪に閉ざされる冬は、出稼ぎに出る者も多く、板打ちされた家がちらほらあった。
ユゥジーンは、おっかなびっくり一人で飛んで、ようよう村までたどり着いた。
別れる時も女の子は、背中を向けたままだった。
仕方がない、あんな雪の中で夜明かしなんて、拒否して当たり前だろ？　無理に強行しようとするあの子がおかしいんだ。
知らない村を一人で訪ねるのは不安だったが、ユゥジーンを見止めた村人の方から、大きく手を振ってくれた。広場に馬を降ろすと、厩係らしき男性がニコニコと寄って来て、慣れた感じで馬を預かってくれた。元々、この村はユゥジーンの受け持ちで、普段から何やかやと世話を焼いていたのだ。
「ユゥジーンさん、こんにちは」
「あっ、ユゥジーン兄ちゃんだあ！」
「あら、ユゥジーンさん、いらっしゃい」
道行く村人も、親しげに挨拶してくれる。
（俺って好かれていたんだな、サンキュ、過去の俺）と、自分で自分に感謝しつつ、勧められるままに村長の家に招かれた。
来村の理由を訪ねられたら、〈先月修理した水門を点検に来た〉と答えておいた。記憶喪失の事は、外では御法度なのだ。そのくらいは、俺でも守れる。
「先月は本当に助かりました。ご覧の通り、うちの息子をはじめ、力仕事の出来る男手は、皆、手稼ぎに出ておりまして」
熱い飲み物を勧めながら、身体の丸まった村長が言った。
「あ、大丈夫、大丈夫。そのくらいお安いご用でしたよ」
腕をぐるぐる回して見せるユゥジーンは、台所の方から視線を感じた。十歳ぐらいの男の子が顔を覗かせている。
「こら、失礼じゃぞ」

叱られたが、子供は逆らって、部屋に一歩踏み込んだ。
「点検って今から行くの?」
「え? ああ、うん、そうだね。行くとするか」
ユゥジーンは慌てて立ち上がった。
「今日はもう暗くなります、明日にされれば?」
「いえいえいえ、今日中に行っておきますよ」
何だか自分だけ暖かい思いをしている後ろめたさもあって、仕事の真似事ぐらいは、しておこうと思った。
「お祖父さん、近道を行ったら半分の時間で行けるよ。僕が案内する」
言いながら、子供はさっさと自分の外套を羽織って、ランタンを持って先に出た。
外に出ると、子供はもう先の辻で手招きしていた。
「おーい、待って待って」
走りながら上衣を引っ掛けるユゥジーンに構わず、子供はスタスタと歩き続る。やれやれ、今日はマイペースな子供に翻弄される日だ。雪の道をえっちらおっちら追い掛け、ようやく、村外れの水門の前に着いた。
子供は水門の石垣の上で振り向いて、ムスッとして言った。
「ね、ユゥジーンさん、前に来た時、ここでしてくれた約束、覚えてる?」
「えっ?」
困った…、この子と何か約束したんだろうな。
ここで子供の心を傷付けちゃったら、過去の俺に申し訳ない。何とか上手く聞き出せないかな。そんな事を考えながら近付くと、子供の方から喋り出してくれた。
「あの後、来てくれないから、忘れられたかと思ったよ。大人達は相変わらず僕のいう事なんか信じてくれないし。ユゥジーンさんだけが信じてくれて、調べるって約束してくれたから、ずうっと待っていたんだよ」
「うむ…」
どうやら何かお土産を約束した程度の軽い物ではなさそうだ。
「すまない、あの後、身体を壊してしまってね、延び延びになっちまった」
あながち嘘ではない。
「もう元気一杯だから大丈夫だ。ところで、その件だが…もう一度、順序立てて、詳しく話してくれないか」
とにかく、聞き出さない事には、ラチがあかない。
子供は、ちょっと上目でユゥジーンを見やってから、話し始めた。

「一ヶ月前の事、覚えている？　村から蒼の里に手紙が行ったよね」
「ああ…」
　この水門が壊れて村に水が来なくなったという内容で、普段から懇意にしているユゥジーンに助けを求めて来た…って長様に聞いた。
　ユゥジーンは水門を見上げた。太い木材を積んで水流を調整する方式の物で、高さも幅も結構な規模だ。俺、よくこんなのを修理したなあ。
「あの時も、ユゥジーンさんが着いたらすぐ、僕が案内したんだ」
「ああ…」
「修理は簡単だった。溝に引っ掛かった樽木を戻すだけだったから。ユゥジーンさん、何でこれしきの事で自分を呼んだのかって不思議がっていたよね」
「う、うん…」
「そりゃそうだ、溝はわざと僕が詰まらせたんだもの。お祖父さんに手紙を書かせて、貴方を呼び出す為に」
「・・!!!!」
　＊＊＊
　夕闇の蒼の里の執務室。
　カンテラのオレンジの灯りのもと、蒼の長が、くしゃくしゃの手紙を眺めている。
　外から戻ったホルズが声を掛けた。
「それは？」
「雪洞のユゥジーンの懐にあった手紙です」
「ああ、例の水門の修理ってやつか」
「今から考えると、ちょっと不思議なんだよね」
「何が？」
「本来なら、村の水門なんてものは、その村で面倒を見なければならない。自分達で扱えない地形のねじ曲げは、するべきではないからね。だから、こういう依頼は後回し…どころか、ふるい落とされる種類の物なんだ」
「そういえばそうだな」
「でも、あの朝リリは、この手紙を『最優先』に選り分けた」
「……」

〜　Ⅱ　へ　〜

二〇二三・六・一〇